

八木 宏典

『水田農業の発展論理』

日本経済評論社 1983.3 iv+315 ページ

本書は佐賀平坦地農業の、大閩検地に始まる近世以降現代に至る長期間の水田農業の農法の発展を詳細に分析したものである。

何故佐賀農業を選んだかについては「序論」に、それが暖地稲作の典型的な発展のパターンを示していること、次にそれはクリーク農業という特殊性をもつが、それは水田農業発展の指標としての「乾田化」の研究に便宜を与えるという点にあると述べている。ところで日本各地の水稲反収の推移を明治以降について見ると、大正期までは奈良県が断然高く、昭和8年頃、佐賀県がこれに追いつき、その後、両県共一進一退を続けるが、昭和30年代に至り佐賀は奈良を遥かに追い越し、奈良はいずれかといえば停滞を続ける。しかし佐賀は今日、その水準で全国首位にあるかという決してそうではない。戦後、長野県を筆頭とした山形、青森、秋田の東北グループの反収躍進には目覚ましいものがあり、昭和36年には長野は500 kgを遥かに突破して日本米作史上の新記録を打ち立てる。佐賀は「長野に追いつき、長野を追いこせ」というスローガンで頑張りそれに近づくが、その後、青森、山形などの上昇は更に著しく、遂に600 kg台を突破して全国首位にたち、佐賀は530 kg台で停滞している。すなわち佐賀は反収では依然、西南暖地の雄ではあるが、今日、いかにその停滞を打破り600 kg台に達

するかという課題をかかえている。本書は当初に述べた如く、暖地稲作の典型的な発展過程を明かにするが、それと共に、今後の進むべき方向、或は課題をも示そうとしている。

本書の分析する対象は「農法」であるが、それは「農業技術の体系」である。それには「栽培技術」と「作業体系」の両面があり、その2つが相互にからみ合っている。そしてそれを活動させているのが「経営」であり、それはいわば「生産力の担い手」である。そして経営は技術と社会経済との結節点であり、ここに「歴史的範疇としての経営方式」が生まれる。著者は「農法」を「経営方式」に、従って「歴史的範疇」に関連させつつ分析している。「序論」ではこのような農法論が、広く(22人に及ぶ)諸家の主張を参照しつつ詳しく論ぜられ約30ページがそれに用いられている。注意しておきたいのは、各時代の農法が、それぞれの時代の社会体制従って土地所有形態に深く関連をもち、市場経済すなわち市場の広さや他産業における労働市場の展開、自然的条件特に地形、海潮の干満差、降雨量とその分布などの基礎条件の上に形成されていくが、「一定段階の農法の展開が、次の農法形成の原型を生み出す」として各時代の農法形成の過程を分析している点で、いわば生産力の形成発展が、社会経済の発展を先取りした形で行われ、社会経済の変革を促す要因となることを指摘していることである。

ところで著者は佐賀における農法発展の段階を、近世の幕あけともなる「大開検地」、「明治維新」、「戦後改革」の時期をもって区分し、それぞれ「近世農法」、「近代的農法」、「現代(戦後)農法」と名付け、それぞれの分析を行う。しかし著者は大体17世紀に始まる「近世農法」が発達する以前にまで溯り、13世紀以降の中世における佐賀農業の展開を、多数の古書・文献・諸報告書によりつつ明らかにしている。それがⅡ章の内容であるが、ここで著者は佐賀農業のもつ立地条件を詳しく述べている。それを簡略に紹介すると、気温が暖く、二毛作が出来、降雨量が多く、それが6~7月に集中する。また平野が広汎に亘って傾斜が少なく、地元で堀(ほり)と呼ばれるクリークが網の目のように作られ、用水と排水を兼ねて行って来た。また背後山地が浅いため集水面積が小さく、水利は主として天水とクリーク水に依らねばならなかった。また南方に干満差の著しく大きい(4m)有明海を控えて居り、満潮時に押し上げる筑後川の逆流水(アオという)が灌漑に利用された。海深が浅いので、防波堤を築いては開田が進められた。こういう自然的条件に取り組み、各時代の社会経済条件のもとで、色

々の経営主体が活躍した変化を遂げ、そこに色々の農法が生まれ発展した変化を遂げたといえる。

Ⅲ章では「近世小農経営の成立と展開」と題して、「近世農法」の形成と展開が約90ページに亘って論ぜられる。同じく多数の文献が引用されているが、ここでは特に旧家の日記や郷土誌、村誌など古い記録が丹念に用いられている。「近世農法」を簡潔にいうならば、経営主体にはまず下人使用の複合大家族経営(名主的大百姓経営)があり、それが大自作年雇経営に発展する。それより規模の小さい百姓経営があるがそれが近世中農層へと前進する。それらの下に多数の下人、傍系血族の半農・雑戸層があって、年雇の供給源となっている。農業技術としては人糞尿、刈敷など自給肥料が中心であったが、干鰯、醬油粕、焼酎粕など有機質購入肥料が次第に用いられ、特に当初はまだ極めて少ないが後期に次第に多くなる乾田においてそうであった。品種としては初期には印度型赤米種が早熟性で低湿田に強く、端境期の食糧確保や台風回避の目的で依存率高く用いられたが、後期には長稈穂重型晩稲が定着し、クリークの泥土も加え多肥化が進み、「二期作」と呼ばれる一種の輪作形式(早中稲→菜種・麦・蚕豆→晩稲→休閑)が定着する。揚水手段としては汲桶から始まるが次第に踏車が導入され、耕耘は人力耕から次第に馬耕となり、犁は長床犁から中床犁に推移、定着する。水利は著名な佐賀藩の成富兵庫の指導下に行われた藩の治水開田事業(1567—1640)で大きく進歩し、クリーク水利の体系が出来上る。しかし水田は全体としてまだ半湿田の状態であった。しかし反収は初期の1.0~1.5石の段階から2.0~2.5石の段階に進む。

Ⅳ章では「近代的稲作農業の胎動といわゆる『佐賀段階』」と題して「近代的農法」の形成と展開が論ぜられる。対象となる時期は主に明治後半期から昭和戦前期までであるが、特に大正末期から昭和10年代に至るいわゆる「佐賀段階」の形成が分析の中心となる。この時期の佐賀農業の展開については田中定、山田龍雄、磯辺俊彦、鎌形勲、宮島昭二郎など諸家の豊富な研究業績があり、著者はそれらを存分に利用し、更に考察を加え約50ページにまとめている。この時期には前期の大自作年雇経営が後退し、それよりも小さい経営の中農層が自作・自作地主層へと上昇し、零細な半農・雑戸層が小作・小自作へと前進し、大正期以降、いわゆる「自作前進」(田中)が遅く続けられる。「近世農法」では雇用は年雇であったが「近代的農法」では臨時雇となり、いわゆる「家族中心経営」が一般となる。技術は化学化・動力化が顕著で、まず化学肥料の多用、従って短稈穂数

型晩稲の多肥密植栽培が行われ、揚水は電動機による揚水ポンプが一般化し、耕耘は改良短床犁による馬耕が行われ、脱穀調製も動力化する。水田の乾田化が進み、作付は晩稲一期作となり米麦二毛作が定着する。なお作業の動力化が春秋作業の労働ピークを著減するが、これには北九州労働市場の発展による労働力流出が関係している。また揚水ポンプの普及でクリーク水位を踏車時代より低く保つことが出来、湿田の乾田化にも役立った。かくして水稻反収は前期の2~2.5石水準から2.8~3.3石水準へと上昇する。要するに踏車や有機質肥料など前期に見られた萌芽が近代化し、乾田化が進み、それにつれて品種、栽培法がvariety反収を大きく上昇させ、階層の上昇が行われたのがこの時期であった。

V章は「地域農業システムと家族経営」と題し、「現代(戦後)農法」の形成を論じている。対象とする期間は主として昭和40年代以降であり、戦後の長い停滞を脱して躍進を続け、いわゆる「新佐賀段階」と呼ばれる水準を築いた時代である。経営は申すまでもなく農地改革を経て生れた「小商品生産的自作経営」であり、麦、酪農、藷草などをとり入れた複合経営を目指している。問題は労働力で、北九州の労働市場の発展と共に、九州としては比較的多かった1戸当り農家人口、或は農業就業者が50年代までに著減し、兼業農家比率が著増する。1集落の詳細な経営の実態調査が示されているが、農家の後継者、もしくは30歳代で経営主と目される者が、地元労働市場で他産業就業をしている農家が、34戸中、21戸を占めている。それで佐賀平野の農業は直系家族、或は夫婦のみによる経営への純化が進んでいる。技術面では何よりもトラクター、自脱型コムバイン、田植機などの中型機械化が進み、いわゆる機械化の一貫体系が成立する。しかしそれと並進する形で水稻栽培面での技術進歩があり、短稈穂数型中稲の密植多肥、後期追肥重点の肥培管理、防除技術の発展、中干しと間断灌漑の励行などがあり、収量は10a当り一時は4石(600kg)水準に到達する。しかし著者は当初に述べた如く近年は収量において青森などに追い抜かれ、佐賀はいずれかといえは発展の行詰り傾向にあることを指摘し、その展開方向を最後に取り上げる。

VI章は「むすび」であり、「現代(戦後)農法」の展開課題を論ずる。まず注意したいのは経営であるが、それは「企業的家族経営」が主体であるが、それは集落を一つの単位とした「地域営農組織」に補完されたものであることである。これは機械や施設の有効利用、水利の合理化、複合経営に結び付く集団的輪作方式の形成などか

らいて当然の形式であろう。著者はここでも多数の諸家の主張を考慮しつつ技術面の展開課題を述べている。すなわち品種では極短稈重型の高品質・高収量品種を育成し、暖地特有の栄養成長停滞期の克服技術を開発する必要がある。そのためにはこれまでの「浅耕多肥」から「深耕多肥」への転換が必要であり、そのため耕土を深くし、地下水位を低下させ、適切な土壌構造を形成する必要があり、排水、客土、堆肥多用などの施策が必要になって来る。そのためには用水源の拡大、高度のクリーク体系の整備、農業の有畜化などが必要である。結果としては「耕地を水田と畑と交互に利用する」形になり「地力維持と総合的土地利用のため、稲・麦・飼料または肥料作物の水田3年輪作農法も考えられる」としている。前記の如く、機械の経済効率向上の観点も考え合わせ、この様な輪作は集団化されることが適切で、西南暖地では適切な集団の単位が45ha程度という説があることを紹介している。米収量は10a当り5~5.5石(750~800kg)前後に伸びることが期待される。この様な省力多収の集団化は既に試行の段階に入り、佐賀県小城郡農協では大豆を加えた「四転輪作方式」を案出し、それが集団的に行われているとのことである。

以上、頁数の関係もあり「書評」というよりも専ら本書の紹介に終わった感じであるが、最後にこれも批判ではなく本書で特にわたしが注意して置きたいと思うことを2つ述べて終りたい。

第1は中世から今日まで、色々の農法上の進歩があったが、水利も含めて土地生産力の向上が極めて重要であったし、それがまた現代的課題でもあるということである。これは土地が相対的に稀少であり、雨量が相対的に多いアジア・モンスーン地帯の特色でもある。「地力」が屢々強調され「乾田化」「田畑輪換」「飼料・肥料作物を入れた輪作方式」「有畜化」が展開課題として掲げられている。全く同感である。家畜が農家に帰り、水田にまた「れんげ」の花が咲き乱れることを待望するのは単に過去への郷愁のみからではないと考える。

第2に経営展開の方向として、「企業的家族経営」が主体であるが、それは集落を1つの単位として「地域営農組織」に補完されたものであり、集団化・組織化が、『企業的』小農経営の前進の基盤として積極的な現段階的意義(傍点著者)を認めていることである。そして著者はこの集団化・組織化を次の段階に移る経過的ない階梯の意義(傍点著者)しか認めない意見に反対している。すなわち著者は集団化・組織化を過渡的なものでなく1つの歴史的段階として重要視しようとしている。この点も

極めて興味深い。既述の如く、農法の発展は、その中に次の社会経済の変化を先取りする要素を含むと説かれているが、その将来形態が、アメリカ的或はイギリス的な企業的大経営であるか、それともソ連的な共同経営であるかは問わず、現在のものを1つの段階として重視し、対策もその実地に即して考えようというのであろう。わたしは著者のこの考えにも共感を覚える。いま集落を単位とする集団化・組織化は興亡を繰り返しているが、やがてアメリカ或はイギリス型でもソ連型でもない「近代的契約関係」に基づいて個々の経営を生かした新しい組織体が生まれ、それが日本のみならず、自然的・社会的条件の似通ったアジア諸国の農業発展の1つの規範にもなるのではないかという夢を抱いている。

[沢田収二郎]